

Title	海保青陵の伝記的考察
Sub Title	A biographical study of Kaiho Seiryō
Author	青柳, 淳子(Aoyagi, Junko)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2009
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.102, No.2 (2009. 7) ,p.401(213)- 425(237)
JaLC DOI	10.14991/001.20090701-0213
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20090701-0213

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

海保青陵の伝記的考察

青 柳 淳 子

（初稿受付 2009 年 2 月 25 日、
査読を経て掲載決定 2009 年 4 月 13 日）

はじめに

伝記的研究を通して見えてくる思想家の人間像は、その思想形成過程や思惟構造を知る有効な手がかりとなり得る。しかし海保青陵に関していえば、昭和初期から現在にいたるまで、その個別研究の多さに反して伝記的研究は非常に手薄いのが現状であろう。もっとも、海保青陵が 18 世紀後半から 19 世紀にかけて活躍した「経世家」、あるいは「思想家」という画一的な把握は、海保青陵の文化人としての一面に光を当てた近年の研究によって

改善されつつある⁽¹⁾。先行研究における海保青陵の年譜は略式のものを除いて、谷村一太郎の『青陵遺編集』（國本出版社、1935 年）に収められているもの（以下谷村年譜と略す）と、蔵並省自の『海保青陵経済思想の研究』（雄山閣出版、1990 年）に収められているもの（以下蔵並年譜と略す）がある。

海保青陵は自身の出自・略歴について、「稽古談（巻之五）」に自ら記している⁽²⁾。谷村年譜はこの青陵の記述をもとに、そのほかの史料や調査結果を加えて作成されたものであり、蔵並年譜は、谷村年譜の上に新たな情報を付け加えて作成されたものである。しかし、谷村・

- （1）平石直昭は、遊歴文人としての海保青陵に注目し、そこから青陵思想の分析を試みている。（平石直昭「海保青陵の思想像——「遊」と「天」を中心に——」『思想』677、1980 年 11 月。）また八木清治は平石の研究を踏まえた上で、青陵の「交遊」関係を医家・文人・商人にグループ分けして考察、交遊関係が与えた思想的影響について述べている。（八木清治「海保青陵の交遊」『福岡女子学院大学紀要』第 1 号、1991 年 2 月。）海保青陵の先行研究については、拙稿「海保青陵における「己」と「智」——青陵思想の愚民観をめぐって——」（『日本経済思想史研究』第 8 号、2008 年 3 月）を参照のこと。
- （2）蔵並省自編『海保青陵全集』所収、雄山閣出版、1990 年、以下『全集』と略す。本稿青陵引用文はすべて『全集』による。

蔵並年譜は各事項に関する出典名は記されているものの、事項に関する詳細について触れられていない。そのため、海保青陵の経歴や行動、その背景を具体的に追い辛いという印象を受ける。また蔵並年譜には誤りと思われる部分や省略されている事項もあり、一方新たに判明した事実もある。したがって本稿ではこの蔵並年譜に加筆修正を加え、新たな海保青陵年譜の作成を試みた。思想家がどのような一生を送ったのかを考察することにより、成長過程や周辺の人間関係が見えてくる。そうした環境が思想家にどのような影響を及ぼしたのかを考えることは思想分析において少なからず意義があり、海保青陵の伝記的研究にも貢献しうるものとなろう。

蔵並年譜に記載されている事項、補足加筆事項の冒頭には「●」を、蔵並年譜の記載内容を修正した事項の冒頭には「○」を、蔵並年譜にはまったく記載されていない新たな事項には「◎」を付けた。基本的に蔵並年譜の記載を踏襲し、加筆修正不要な事項については記載する必要はないのかもしれないが、海保青陵の生涯を把握するためにすべてを一覧できる年譜の再構築、という意味で本稿でも「●」を付けて再度記載することにした。また

『全集』で追跡可能なものには該当箇所および頁数も加筆した。年齢は当時にならない、すべて数え年とする。

海保青陵と親交のあった登場人物については、八木清治「海保青陵の交遊」（『福岡女子学院大学紀要』第1号、1991年2月）、および、長山直治「加賀藩における海保青陵と本多利明——加賀藩関係者との交遊とその影響について——」（『石川県立金沢錦丘高等学校紀要』15号、1987年）から情報を得た。また文中人物の生没年については、『国史大辞典』（吉川弘文館）、『国書人名辞典』（岩波書店）から情報を得た。その他に依拠する文献についてはその都度表記した。

1. 幼少時代

先行研究において青陵の父、角田市左衛門青溪の名前を目にすることはしばしばあったが、その経歴についてはこれまでほとんど述べられてこなかった。角田青溪（1730～1789）は宮津藩の財政再建に貢献し、宮津藩致仕後は尾張藩で教化政策に携わった人物である。⁽³⁾ 同じく尾張藩に仕えた弟の存在も青陵の記述によって知られる所であり、その他の家族に

(3) 角田青溪については名古屋市役所編『名古屋市史人物編下巻』（1981年、p.245）参照。青陵は父について以下のように記している。「先生（父角田青溪のこと。青陵は青溪先生と呼称。）ハ始メハ春台門人ノ大塩与右衛門トヒフ儒者ノ門人也。後ニ瀧水先生宇佐美恵助ノ門人トナリテ、徂徠派ノ儒者也。」（『稽古談巻之五』『全集』p.111。）

大塩与右衛門は大塩鼈渚のこと。『近世儒家人物誌』に、「名は良、字は子顕といひ通稱を與右衛門と稱す、江戸の人なり、家世々商家なり、太宰春臺に學ぶ、天明五年七月十日歿す、年六十九。」と記されている。（松村志孝編『近世儒家人物誌』1914年、芳賀登・杉本つとむ・森睦彦編『日本人物情報体系第四一巻』所収、皓星社、2000年。）ほかに、『国書人名辞典第2巻』（岩波書店、1995年、p.621）にも名前を確認できる。

ついで言及されることはこれまでなかった。筆者は海保青陵の父、角田市左衛門のご子孫から家系図を拝する機会を得た。本稿ではこれを「角田家系譜図」と呼称することにする。「角田家系譜図」の巻末には「十代 猊 謹書」とあり、角田家十代当主の角田猊が記したものとみられる。おそらく明治期に作成されたのではないかと予測することができるが成立年は不詳。記載内容には年月日が記されているので、公的文書に基づいて作成された可能性もあるが原典などの詳細は不明である。青陵の父角田青溪に関しては尾張藩の『御記録』安永7年の項に在職の記述が認められる⁽⁴⁾。この『御記録』にある青溪の在職記録と、「角田家系譜図」の年月日、記述内容はほぼ一致している。したがって、「角田家系譜図」の信憑性はある程度担保されるのではないだろうか。なお、「角田家系譜図」と青陵の記述年代には食い違う部分があることを指摘しておく。自伝的記述が含まれる『稽古談』は青陵晩年の著作であり、記憶違いの年代が記されている可能性もあるだろう。いずれにしても、「角田家系譜図」と、「角田青溪墓と梅窓院」(磯ヶ谷紫江『墓碑史蹟研究』第39冊、後苑荘、1926年所収)⁽⁵⁾に記された内容によって、

これまで不詳であった青陵の家族像が浮かび上がってくる。

史料1 「角田家系譜図」 角田家所蔵

—— 六代 市左衛門明

…後青溪道人ト称ス。父克寛遺跡ヲ受ケ家老ヲ勤メタルトコロ、存スル子細有リテ青山殿ヲ退キ度旨ニヨリ、青山下野守殿ニテ引取り扶助シヲカレ浪人トナル。明和八年卯四月、竹腰山城守同心並ニ被召出。同九年辰七月十五日、源昭様御學問御用被仰付 安永五年申八月廿五日、御表御會讀御用被仰付、同七年三月廿四日御學問御相手御用ニ付追々御側へ罷出ヘク被仰付、同年十二月新御番ニ被召出、御切米二拾五石御扶持方五人分被下、…天明八年申十一月十九日、老衰其上病氣ニ付、御切米御扶持方差上げ退身ス。寛政元年酉四月廿五日、病死。享年七十。妻公義町与力 赤星新五平衛 娘。

—— 女子 御書院番 海保弥左衛門義熊妻ニ嫁

(4) 『御記録』(旧蓬左文庫、徳川林政史研究所蔵)第347冊(安永七年自正月至六月)の三月廿三日、第348冊(安永七年自七月至十二月)の十二月朔日に「角田市左衛門」の名前が見られる。旧蓬左文庫所蔵史料目録(徳川林政史研究所『研究紀要』第34号～第36号所収)によれば、『御記録』(江戸後期写)は元禄14(1701)年より寛政8(1796)年に至る尾張藩の編年記録で、滝川忠暁が命を受け、成田喜起・小笠原成章・中西長憲が総裁を務め、大塚長幹・角田彪が修撰し、水野孟清が起稿抄録を担当。角田彪は海保青陵の弟である。

(5) 磯ヶ谷紫江『墓碑史蹟研究』第39冊、後苑荘、1926年、pp.466-470。「角田青溪墓と梅窓院」によれば、かつて東京青山の梅窓院には角田青溪の墓石と並んでその妻の墓石、青陵の墓石、さらに青陵の弟とその妻の墓石が存在していたようである。現在は梅窓院に角田家の墓はない。

彦一皐鶴

後海保儀平青陵ト云う。安永四年未三月、源明様エ初テ御目見。同七年戊閏七月十日、病氣依願、御目見之御暇。享和元年酉五月十五日、病氣全快ニ付願之通御目見。如故同三年亥二月廿三日、打續大病相煩、先年之持病再發依願、御目見御暇。天明八年十一月、引請浪トナリ外宅ス。病死年月日享年不詳。

七代一兵衛彪

初メ兵十郎ト云ヒ、瑞陽ト號ス。安永九年子十月朔日、源明様エ初テ御目見、天明三年卯十一月二日、明倫堂學生被仰付、尾州へ罷登、上坐學生被仰付、…享和元年酉正月十一日、御足高五十俵被下、同年二月九日、山本半右衛門跡淑姫様御附物頭被仰付、…文政未六年七月十四日、病死。年六十六。妻 紀州様御家中 倉地権左衛門娘。(原文句読点なし。)

二男一女。曰彦字祥邦、善文童吾嘗請取為記室、病而辭。先生使彦復姓海保、更名皐鶴。字萬和、鳴於三都。曰彪字禎文、充尾子員長、推典籍累遷世孫常侍。女適尾書院郎海保某、生一男一女。…(原文句読点なし。)

照機院了因玄可曄尼公之墓 墓碑

故青溪先生之配、赤星氏、諱久米。父祖皆騎士隸于江都尹。以享保癸丑冬、生于龜洲園中。以宝曆辛未適先生。以寛政癸丑八月四日、卒于市谷邸中、享年六十一。赤峰田順書(原文句読点なし。)

青陵平先生墓 墓誌

先生諱皐鶴、字萬和、別号青陵。初諱彦、字祥邦、青溪先生長子也。宝曆五年乙亥九月生於青山故宮津侯邸。與青溪先生去士張府、後稱病辭。以弟瑞陽先生為家督。遊學四方、終僑居京師。以能屬文、鳴于世。文化十四年丁丑、病而不起。五月廿九日卒。壽六十三、葬黒谷金戒光明寺山上紫雲石西雲院後地。瑞陽先生恐其闕、梅窓院先塋之域建之、列其墳墓碑銘別鐫。文政十癸未五月 外甥里見龍謹識(原文句読点なし。)

史料 1、2 および青陵自身の記述、「稽古談(卷之五)」から海保青陵の家族を確認しておく。海保青陵は、丹後宮津藩青山家の家老角田市左衛門明と、町与力赤星新五平衛の娘、久米の間の長子として宮津藩青山家の江戸藩邸で誕生した。青陵の記述や「角田家系譜図」によると、青陵の曾祖父の代から尼崎藩青山家に仕えており、祖父の代から家老職に就い

史料 2 「角田青溪墓と梅窓院」

青溪平先生之墓 青溪先生墓誌銘并序

先生諱明、字張熙、號青溪。姓平角田氏、本性海保…己酉四月二十四日甲戌、理髮爪浴洗、凡操觚如常。乙亥曉、逆上頭痛少頃之間、如寐而卒。享年七十。…配赤星氏、生

ていたようである。青山家は本家の丹波篠山藩の系譜と、分家の郡上八幡藩の系譜に分かれるが、本家分家間は養子縁組が盛んに行われていた。⁽⁶⁾角田家が仕えたのは分家の青山家であるが、角田青溪が宮津藩致仕後に引き取られたのは本家の篠山藩主忠朝（1708～1760）であった。この忠朝と宮津藩主幸秀（1696～1744）の兄弟は、海保青陵の父、角田青溪の従兄弟に当たる。角田青溪の伯母が幸督正室の死後、継室として幸督に嫁し、幸秀と忠朝を産んだ。青陵によれば、青溪の伯母はもともと幸督正室の寵愛を受け、妹のようにかわいがられた存在で、継室に入ったのは正室の遺言でもあったようである。青陵の父の禄は知行 500 石で、⁽⁷⁾宮津藩致仕後も忠朝から、毎年二十人扶持、金百両の支給を受けていた。⁽⁸⁾「一体、青山家ヨリ先生へ送ラル、扶持米ノコ

トハ、先生一生ハ相カワラズ送ラル、コトユヘニ、鶴（著作中の青陵の自称）遊学シテモヨケレバ、先生モ鶴ノ名ヲ養ハントテ、鶴ガ気儘ニ学問スベシトイ、付ラル。」⁽⁹⁾と青陵も言うように、藩主と親戚関係にあった角田青溪は、致仕後も経済的に窮することなく本家の庇護を受けることができたのである。

さて、海保青陵の兄弟姉妹についてはこれまで不詳であったが、史料 1、2 によって、青陵には御書院番海保弥左衛門義熊に嫁いだ姉と、家督を継いだ弟、角田一兵衛彪がいたことが明らかになる。また、青陵の海保復姓以前の名は、「角田彦一皐鶴」で、後に海保儀平青陵と名乗ったことも確認することができる。「海保儀平」というのは青陵の曾祖父の姓名であるが、これらの諸事情については青陵が「稽古談卷之五」⁽¹⁰⁾に詳細に記している。

(6) 青山家の系譜については以下の文献を参照。「八幡藩主系図」（児玉幸多・北島正元監修『新編物語藩史第 5 巻』新人物往来社、1975 年、p.418）、「尼崎藩主系図」（児玉幸多・北島正元監修『新編物語藩史第 8 巻』新人物往来社、1977 年、p.116）、「篠山藩主系図」（同、p.177）、「青山家系図」（宮津市役所『宮津市史 通史編下巻』2004 年、p.50）、「(5) 青山家譜」（宮津市役所『宮津市史 史料編第二巻』1997 年、p.39）および「稽古談卷之五」（『全集』p.104-111）。また、以下登場する青山家各藩主の受領名・官名、生没年、藩主就任期間等の情報は、木村礎ほか編『藩史大事典第四巻・第五巻』（雄山閣出版、1989 年）を参照。なお、青山家と海保青陵の関係については、拙稿「海保青陵年譜考」（『KEIO Economic Society Discussion Paper Series』Graduate Student No.08-2）、添付資料 1「青山家系譜と青陵の関係図」を参照のこと。

(7) 「鶴ガ父ハ生レオチヨリ知行五百石モトリタル人也。」（『待豪談』『全集』p.958）、「鶴ガ父ハ小諸侯ニ禄五百石ヲ領シテ…」（『富貴談』『全集』p.521。）

(8) 「因州、先生へハ二十人扶持ニ金百両ヅハ、年々送ラレテ…」（『稽古談卷之五』『全集』p.109。青山忠朝は宝暦 10 年 7 月 15 日、大阪城中にて死亡し、同年 9 月に忠高（青山幸道の弟、後に忠朝の養子に入る）が相続した。（『藩史略年表』1760 年の項参照（木村礎他編『藩史大事典第 5 巻 近畿編』所収、雄山閣出版、1989 年。）青陵は忠朝について、「コノ因州ハ御奏者番ヨリ御加役ノ命ヲ蒙セラレテ、コノトキハ寺社奉行也。後ニ大坂御城代ニナリテ、大坂ニシテ卒去也。」と述べている（『稽古談卷之五』『全集』p.106。）『角田家系譜図』では「青山下野守殿（忠高）ニテ引取り扶助」となっており、忠朝の死後、青溪が忠高に扶養されていたことを確認することができる。宝暦 8 年の項参照。

(9) 「稽古談卷之五」『全集』p.109。

(10) 青陵の姓名に関して蔵並省自が考察している。蔵並省自『海保青陵経済思想の研究』雄山閣出版、

宝暦5(1755)年 乙亥 1歳

- 9月、丹後宮津藩青山家の家老、角田市左衛門青溪の長子として宮津藩青山邸にて誕生する。

母、久米は前掲墓碑から宝暦元年に角田市左衛門に嫁いだことがわかる。青陵の記述から彼が「江戸」で生まれたことは把握されていたが、⁽¹¹⁾前掲史料2、「青陵平先生墓 墓誌」の「九月生於青山故宮津侯邸」により、宝暦五年の「九月」に青山邸で誕生していたことがわかる。また史料1、2より父母の生没年が明らかになる。⁽¹²⁾宮津市史によると、青山幸道が宮津藩主を勤めたのは、延享元(1744)年から郡上八幡へ転封になる宝暦8(1758)年までの間である。⁽¹³⁾青陵の父がいつから宮津藩の家老を務めたのか確証は得られないが、「宮津ニ居城ノトキニ、青溪先生家老ノ末席ニ列セリ」とあるように、幸道の時に家老職に就いていたことがわかる。

宝暦6(1756)年 丙子 2歳

- 財政問題が絡んだ宮津藩の内紛によって父、角田青溪が隠居、青陵が家督を継ぐ。
「鶴、家督ニナリタルハ二歳ノ年ナレバ、是ハ宝暦六年也。」(『稽古談卷之五』『全集』p.109。)
「二歳ノ時ニ、父ノ家督ヲ継ギタレ共、…。」(『富貴談』『全集』p.521。)

宝暦8(1758)年 戊寅 4歳

- 宮津藩主青山幸道は美濃郡上八幡藩へ転封。青陵父子は暇願いを出して青山家を致仕。幸道の伯父、篠山藩主青山忠朝に引き取られる。
「同八年ニイトマノ願ヒ差出ス。」(『稽古談卷之五』『全集』p.109頁。)
◎弟、兵十郎が生まれる。(史料1「文政末六年七月十四日、病死。年六十六。」より逆算。)
蔵並年譜では、青陵父子の致士について述べられていないが、青陵父子にとっては見過ごすことができない一件であるため、その背景を確認しておきたい。青山幸督～青山幸秀

1990年、p.7。釈雲室の随筆にも青陵や弟の名、字が記されている。釈雲室『雲室随筆』(森銑三・北川博邦編『続日本随筆大成1』所収、吉川弘文館、1979年、pp.78-79)。釈雲室(1753-1827)は信州水内飯山の光蓮寺に生まれた。安永2(1772)年に江戸に出、宇佐美瀧水に儒学を学び、後林家にも出入りした。山水画に長じ、漢詩を能くし、柏木如亭らと詩画の社小不朽社を結んだ(『国書人名辞典第一巻』岩波書店、1993年。)。雲室に関する文献は、茅原東學「雲室論」(『中央美術』所収、第5巻第12号、1919年)、渡邊刀水「雲室上人」(『伝記』所収、1936年5月)、相見香雨「雲室修禅余墨」(『相見香雨集二』所収、青裳堂書店、1986年)、高井蒼風「画僧雲室の芸術」(『信濃畸人傳』所収、一光社、1971年)がある。

- (11)「鶴ハ江戸ニ生レタル故ニ…」(『養心談』『全集』p.420)、「鶴ハ江戸生レ也。」(『養蘆談』『全集』p.184。)
また「宝暦五年生まれ」は「文化十四年五月二十九日病歿壽六十三」という青陵の墓碑銘からの逆算でも確認することができる。谷村一太郎編『青陵遺編集』(国本出版社、1935年、p.8)、前掲蔵並、p.14参照。
- (12)父、角田青溪の略歴は『名古屋市史 人物編下巻』(名古屋役所編国書刊行会、1981年、p.245-246)にも記されている。
- (13)前掲『宮津市史 史料編第二巻』p.8。

の後を継いだのが、角田青溪が仕えた幸道である。「稽古談卷之五」によれば、青陵が生まれた頃の宮津藩財政は「宮津侯ノ貧ナルコトイフバカリナシ。」という状態であった。家臣の一部が宮津藩を装って若狭国で借金を重ね、その上収納米を全て若狭へ廻して架空名義の蔵へ収めるなど、一部家臣の着服が甚だしく、江戸へは米が廻らない状態であったという。このような状況であるにもかかわらず、藩主幸道は「芝居役者ナゾヲ抱ヘテ、酒宴ヲ」し、その行動は眼にあまるものであった。この事態に物申したのが幸道の叔父、忠朝（角田青溪の従兄弟）である。忠朝は激怒し、幸道は事実上更迭される。そこで宮津藩の財政問題解決に抜擢されたのが「コノ以前ニ役儀ヲ辞セラレテ、番頭ノ末ニ列シテ」いた青陵の父角田青溪なのであった。青溪は忠朝より勝手方家老を命じられ、宮津の国家老小出弥左衛門とともに財政問題解決に取り組むことになったのである。

2. 少年～青年時代

宝暦 14 / 明和元 (1764) 年 甲申 10 歳

- 父も師事した荻生徂徠晩年の高弟、宇佐美瀧水⁽¹⁴⁾ (1710～1776) に入門。（『稽古談卷之五』『全集』p.111, 「洪範談」『全集』p.584。）

明和 6 (1769) 年 己丑 15 歳

- 15-6 歳の時、宇佐美瀧水の塾で礼記を鄭注にて読む。（『文法披雲』『全集』p.719。）

瀧水塾で礼記を鄭注で読んだ際、青陵は鄭の説に疑問を抱き、別の説を立てた。仲間は青陵の説を支持したが、それを聞きつけた瀧水に鄭注が正しいと叱咤されたエピソードを記している。

明和 7 (1770) 年 庚寅 16 歳

- 16-7 歳の時、蘭方御典医桂川甫三宅に居住。青陵は桂川家を通して西欧の情報に触れていた。（『天王談』『全集』pp.512-513 参照。）甫三の息子は、のちに『ターヘル・アナトミア』の翻訳に参加した蘭方医の桂川甫周⁽¹⁵⁾。その弟は文人の森島中良である。

(14) 宇佐美瀧水に関する文献は、佐野正巳『松江藩学芸史の研究』（明治書院、1981 年）、宇佐美瀧水『瀧水叢書』の解題（『近世儒家文集集成』所収、第 14 巻、ペリかん社、1995 年）、などを挙げる事ができる。佐野は瀧水周辺の人脈などについて詳細に考察している。また、前掲『雲室随筆』には、瀧水の塾内の雰囲気などが述べられていて、海保青陵、青陵の父や弟に関する記述もある。

(15) 桂川家については、戸沢行夫『オランダ流御典医 桂川家の世界』（築地書館、1994 年）、今泉源吉『蘭学の家 桂川家の人びと』（篠崎書林、1965 年）、今泉みね『名ごりの夢』（平凡社（東洋文庫）、1963 年）を参照。戸沢は、蘭学者、戯作者など様々な顔を持つ森島中良を中心に江戸の世界を描き、そこから見える大都市・江戸を「知的な万華鏡の世界」と表現する。戸沢が示している狂歌師の一覧表には、江戸に居住する狂歌師名五十名が列挙されており、幕臣、藩士、医者、旅宿屋、両替屋、商人から遊女にいたるまで様々な身分、職業の人々をみることができる。（前掲戸沢、pp.143-146。表 3.1

明和8(1771)年 辛卯 17歳

●父、角田青溪が尾張藩へ出仕。青陵も尾張藩主徳川宗睦(1733-1800)へ初御目見。(「稽古談卷之五」『全集』p.109,「富貴談」『全集』p.521,「待豪談」『全集』p.964。)

青陵の記述では自分が17歳の時、父と同時期に尾張公へ「初御目見」した印象を受けるが、前掲史料1,「角田家系譜図」では「安永四年未三月、源明様エ初テ御目見。」とあることを指摘しておく。⁽¹⁶⁾

安永3(1774)年 甲午 20歳

●この頃より著述を始める。(「洪範談」『全集』p.585。)

安永5(1776)年 丙申 22歳

●尾張藩に御目見を返上。弟、角田彪(1758-1823)に家督を譲り、150石で丹波篠山藩青山忠高に儒者奉公し、門人の世話によって日本橋檜物町に塾を開く。青陵は尾張藩の儒者という「大国ノ奉仕」よりも「自由ナル」大名の家来を選んだ。(「稽古談卷之五」『全集』pp.109-110,「天王談」『全集』p.507,「富貴談」『全集』p.521。)

○師、宇佐美瀧水、67歳で没する。

青陵は「鶴二十三歳ノ年ニ瀧水先生没セリ。」

(「洪範談」『全集』p.584。),「鶴ガ二十三ノトキ先生卒セリ。」(「稽古談卷之五」『全集』p.110。)

と述べている。そしてこれら青陵の記述を受けたと思われるが、蔵並年譜では、安永6年、青陵23歳の欄に「師、宇佐美瀧水没す(洪範談小引)」と記されている。まず、「洪範談」,「稽古談」は、ともに文化10(1813)年、青陵晩年59歳に成立したもので、自身の年代記述に記憶違いの可能性が指摘できる。次に、『雲室随筆』の記述には「安永五年九月九日に、宇子迪先生は物故せられたり。」⁽¹⁷⁾とあり、「宇佐美瀧水墓碑銘」⁽¹⁸⁾では、「安永五年丙申六月十六日罹疾八月九日逝去享年六十七…」と記されている。『雲室随筆』の記述と瀧水の墓碑銘では没日に1カ月の相違はあるが、『国書人名辞典』(岩波書店)や『国史大辞典』(吉川弘文館)と同じく本稿では安永5年を宇佐美瀧水の没年と把握することにした。

安永7(1778)年 戊戌 24歳

◎青山家に儒者奉公する。

「鶴二十三ノ時ヨリ御譜代大名ノ家二百五十石ニテ儒者奉公ヲ志タリ。」(「待豪談」『全集』p.964,安永5年の「稽古談」引用参照のこと。)

史料1「角田家系譜図」では、「同(安永)七年戊閏七月十日、病氣依願、御目見之御暇。」

「天明新鐫五十人一首 吾妻曲狂歌文庫」にみる狂歌師一覧。)青陵を取りまく人々も、また青陵自身も、知的文化都市—江戸—の万華鏡を彩る色ガラスの一片として存在していたのであろう。

(16)『新修名古屋市史』では、青陵の記述がもとになっているのか、角田青溪について「徂徠学派の儒学者で明和8年に、子の青陵とともに尾張藩に招かれた。」とある。『新修名古屋市史第四巻』名古屋市、1999年、p.213。

(17)文化10年の項を参照のこと。

(18)前掲『雲室随筆』p.79。

(19)服部元立「宇佐美瀧水墓碑銘」(五弓雪窓編『事実文編三』所収、関西大学出版、1980年、p.51。)

と記されており、青陵の記述「二十二歳ノ時ニ御目見ヲバ差上テ（安永5年）」と一致しないことを指摘しておく。

◎3月23日、父、角田青溪が尾張藩の御会読御用となる。

「三月廿三日 竹腰山城守同心角田市左衛門儀 御会読御用ニ付追々御側江罷出候様被仰出也」（『御記録』第三四八冊、徳川林政史研究所蔵）

「同七年三月廿四日御學問御相手御用ニ付追々御側へ罷出ヘク被仰付」（史料1「角田家系譜図」）

◎12月1日、父、角田青溪が新御番に召し出され、御切米二十五石、御扶持五人分を得る。

「十二月朔日 新御番ニ召出御切米廿五石御扶持五人分被下置旨竹越山城守同心並角田市左衛門」（『御記録』第34冊、徳川林政史研究所蔵）

「同年十二月新御番ニ被召出御切米二拾五石御扶持方五人分被下」（史料1「角田家系譜図」）

安永9（1780）年 庚子 26歳

◎10月1日、弟、角田彪、尾張藩主徳川宗睦に初御目見。

「安永九年子十月朔日、源明様エ初テ御目見。」（史料1「角田家系譜図」）

3. 遊歴時代

天明4（1784）年 甲辰 30歳

●初めて武蔵国を離れ、伊勢神宮へ代参する。（「稽古談卷之五」『全集』p.110、「東驢」『全集』p.367。）

●30歳のころ、青山家の儒者奉公を辞す。（「稽古談卷之五」『全集』p.110、「待豪談」『全集』p.964。）青陵の記述から、致士後も青山家と懇意であった様子が伝わってくる。なお、史料1「角田家系譜図」には「天明八年十一月、引請浪トナリ外宅ス。」とあって天明4年の「三十ノコロ其屋シキヲ辞シテ」という青陵の記述と矛盾する。

天明8年（1788）年 戊申 34歳

◎11月19日、父、角田青溪が老衰のため尾張藩を致士。

「天明八年申十一月十九日、老衰其上病氣ニ付、御切米御扶持方差上ゲ退身ス。」（史料1「角田家系譜図」）

天明9／寛政元（1789）年 己酉 35歳

●初めて京都へ行く。⁽²⁰⁾

◎2月24日、京都、伊藤東所（1730-1804）の古義堂を訪ねる。

「二月廿四日 一 海保儀平 車屋町二条上ル 森禮蔵 紹介 江戸人」（『諸生初見帳』天理大学附属天理図書館蔵）

●3月16日、初めて木村兼葭堂と会う。（『兼葭

(20) 「東驢」『全集』p.357。

堂日記⁽²¹⁾』)

木村兼葭堂(1736-1802)は海保青陵の師、宇佐美瀧水とも親交があった⁽²²⁾。

●4月18日、木村兼葭堂と会う。(『兼葭堂日記⁽²³⁾』。)

○4月25日、父角田青溪没。

「寛政元年酉四月廿五日、病死。享年七十。」(『角田家系譜図』)

「巳酉四月二十五日乙亥、如寝而登化。葬於青山梅窓院後地。私諡協眞公。享年七十。」(『協眞公像⁽²⁴⁾』角田家所蔵)

「己酉四月二十四日甲戌、理髮爪没洗、凡操觚如常乙亥曉、逆上頭痛少頃之間、如寐而卒。享年七十。」(資料2「青溪先生墓誌銘并序」)

蔵並年譜では「寛政四年秋」に父が没したと記されているがこれは誤りである。秋というのも正しくない。蔵並年譜にある「在京中」というのは「三十五ノ時ニ、始テユルリト上京シタ」時のことになる⁽²⁵⁾。

寛政2(1790)年 庚戌 36歳

●元日を京都で迎える。

谷村年譜、蔵並年譜を参照。「扨、三十五ノ時ニ、始テユルリト上京シタリ。其後ハ度々遊学シテ、京ノ元日モ七度、大坂ノ元日モ兩

度、駿府ノ元日一度、伊勢山田ノ元日一度、武州川越ノ元日一度、越後三条ノ元日一度見タリ。」(『東臚』『全集』p.357)という記述から、谷村は諸事情を推測して寛政二年以降の「元日は〜で」という情報を年譜に記しているものと思われ、蔵並年譜でもそのまま転記されている。その他の史料による裏づけの確証は得られないが、本稿においても、以降その通りに記すことにする。

寛政3(1791)年 辛亥 37歳

●元日を駿府で迎える。百日ほど滞在。(『變理談』『全集』p.456。)

●8月18日、大坂の木村兼葭堂を訪ねる。(『兼葭堂日記⁽²⁶⁾』。)

●10月29日、木村兼葭堂を訪ねるが留守。(『兼葭堂日記⁽²⁷⁾』。)

寛政4(1792)年 壬子 38歳

●元日を京都で迎える。(寛政2年参照。)

●夏、大坂福島浄祐寺にて文法を講義する。(『天王談』『全集』p.497、「文法披雲」『全集』p.690頁。)

●横田大介・長尾朝陽が青陵の文法講義を筆記したものが不完全ながら冊子になる⁽²⁸⁾。

(21) 木村兼葭堂著、水田紀久編『兼葭堂日記 翻刻編』兼葭堂日記刊行会、1972年、p.248。

(22) 木村兼葭堂については『国史大辞典4』(吉川弘文館、1984年、pp.214-215)、前掲佐野、1981年を参照。

(23) 前掲『兼葭堂日記』p.250。

(24) 『協眞公像』は角田家所蔵の画賛軸。角田青溪の肖像画と賛が記されている。成立年、作者不詳。

(25) 「稽古談卷之五」『全集』(p.110)にある青陵の記述参照のこと。

(26) 前掲『兼葭堂日記』p.314。

(27) 前掲『兼葭堂日記』居住地を離れた時の記述は朱書きであった。同解説、p.469。

(28) 前掲蔵並、1990年(p.26)に『文法披雲』刊行に関する考察がなされている。

◎冬、「為喬木子克作其家所伝之古ヒ首記」を
撰する。⁽²⁹⁾

寛政 5 (1793) 年 癸丑 39 歳

●越後蒲原郡一ノ木に遊び大庄屋小林某家に
逗留。文法等を講義する。弥彦駅まで 3-4
人に見送られて帰路につく。〔「稽古談卷之
五」『全集』pp.95-96。〕

○8月4日、母、久米没する。享年 61 歳。

「寛政癸丑八月四日卒于市谷邸中享年六十
一」(史料 2 照機院了因玄可暉尼公之墓 墓碑)

●母の喪を終えて再び西遊へ。出先では必ず
逗留し、書を講義した。〔「稽古談卷之五」『全
集』p.110。〕

寛政 6 (1794) 年 甲寅 40 歳

●わらじ履きで歩いて遊歴していたが、40 歳
より駕籠を使うようになる。(寛政 5 年参照。
「洪範談」『全集』p.685, 「稽古談卷之五」『全
集』p.96。)

寛政 7 (1795) 年 乙卯 41 歳

●元日を大阪で迎える。(寛政 2 年参照。)

◎春、長田徳本著／稲葉文礼・和久田叔虎共
校『徳本翁十九方』に「稲葉文禮得徳本翁
十九方記」を撰する。

記末に「寛政乙卯春 東都處士青陵海保阜
鶴萬和撰」⁽³⁰⁾とある(長田徳本著／稲葉克・和久
田虎校『徳本翁十九方』文化元年、早稲田大学所
蔵)。「徳本翁」は永田徳本のこと。永田徳本
は戦国時代から江戸時代前期にかけての医者
で生没年不詳⁽³¹⁾。稲葉文礼は、江戸後期の医者。
和久田叔虎は弟子。一方、和久田叔虎(1768-
1824)⁽³²⁾は漢学者・医者。寛政 8 (1796) 年、
29 歳で皆川淇園に入門し漢学を学んだ。青陵
の記した「稲葉文禮得徳本翁十九方記」の冒
頭に「遠州濱松和久田叔虎、識邁而理達、嘗
問文章於余」とあるので和久田叔虎は青陵に
学んだようである。

●大坂、澁氏小巷(淀屋小路)に塾を開く。(伊
東祐昌撰文「文法披雲」『全集』p.787。)

寛政 8 (1796) 年 丙辰 42 歳

●元日を大坂で迎える。(寛政 2 年参照。)

●1月19日、木村兼葭堂と会う。〔『兼葭堂日
記』⁽³⁴⁾。〕

(29) 「為喬木子克作其家所伝之古ヒ首記」は、平成 19 年 2 月 1 日～5 日、銀座松坂屋で催された「古書
籍・書画幅大即売会」の目録抄(p.137)に海保青陵書巻として掲載されている。

(30) 前掲谷村、1935 年(p.240)には、「稲葉文禮得徳本翁十九方記」の全文が掲載されているが、出
典に関する記述はない。

(31) 『国史大辞典』では「永田」徳本となっている。『国史大辞典第十巻』吉川弘文館、1989 年、p.606。

(32) 松田邦夫によれば、稲葉文礼の名は克、通称は意中(または維仲)、号は湖南、文礼は字。稲葉文礼
に関する情報は、松田邦夫「稲葉文礼と和久田叔虎」(大塚敬節・矢数道明編『稲葉文礼 和久田叔虎
1』(近世漢方医学集成 83) 所収、名著出版、1982 年)、および『国書人名辞典第一巻』(岩波書店、
1993 年、p.174)を参照。『国書人名辞典第一巻』では文礼の生没年は不詳となっているが、「文礼と
叔虎の年譜」(前掲大塚・矢数編『近世漢方医学集成 83』所収、原典は矢数道明『漢方治療百話』第
二集「読腹證奇覧」)によれば文化 2 年、浪花において死去。

(33) 『国書人名辞典第四巻』岩波書店、1998 年、pp.796-797。

●4月27日、木村兼葭堂を訪ねる。〔『兼葭堂日記』⁽³⁵⁾〕

●10月3日、青陵からの紹介状を持った和久田豹吉（前出の和久田叔虎のこと）が初めて兼葭堂を訪ねる。〔『兼葭堂日記』⁽³⁶⁾〕

●京都の医者、三谷公器が青陵の文法講義を記して冊子とする。〔『文法披雲』『全集』p.690。〕⁽³⁷⁾

○塾を京都に移す（?）。

谷村、蔵並両年譜とも出典は文法披雲とだけ記されているが、京都に塾を移したのが「寛政八年」とあるという記述は認められない。文法披雲末尾に伊東祐昌が記した文が掲載されている。そこには、「先是乙卯青陵先生自東府来開塾於浪花澁氏小巷…三年於茲矣及先生移塾於京師吾猶幼而不能從先生也…」と記されている。〔文法披雲『全集』p.787。〕「三年於茲」というのが、「伊東祐昌が寛政七（1795）年、澁氏小巷（淀屋小路）の青陵開塾から3年、指導を受けた」という意味であれば、京都に塾を移したのは寛政7年から3年経た寛政10年頃となるのではないか。伊東祐昌撰文の日付は「寛政丁巳春三月」となっている。

寛政9（1797）年 丁巳 43歳

●元日を京都で迎える。（寛政2年参照。）

寛政10（1798）年 戊午 44歳

●元日を京都で迎える。（寛政2年参照。）

●文法披雲が板行される。〔「文法披雲叙」を参照。文法披雲『全集』p.689。〕

寛政11（1799）年 己未 45歳

●元日を京都で迎える。（寛政2年参照。）

◎5月、司馬江漢に会う。

中島次郎は、司馬江漢（1747–1818）宛ての青陵書簡について考察している。⁽³⁸⁾寛政12年8月27日付江漢から青陵宛に書かれた書簡に「其後ハ能処へ御引移被成候よし」と記されている。中島は、「其」時に江漢が京都で青陵に会っているはずであると指摘する。そして、江漢が京都を訪れたのは寛政元（1789）年、寛政11（1799）年、文化9（1912）年の3度であると述べ、そのいずれかに江漢と青陵が会っているはずであるとした上で、寛政12年8月27日に青陵宛書簡を江漢が記していることを理由に、寛政11年説を主張する。さらに、江漢が寛政11年4月12日に大坂に入り、6月には江戸に戻っているという旅程を確認し、青陵と江漢が会った「其」時とは寛政11年の5月が妥当なのではないかと述べている。

◎市河寛斎と約十年振りに富山で再会する。

「青陵至京師」（寛政十一年、寛斎五十一歳の作）

(34) 前掲『兼葭堂日記』p.382。

(35) 前掲『兼葭堂日記』p.388。

(36) 前掲『兼葭堂日記』p.399。

(37) 海保青陵の著作については、添付資料2「海保青陵の著作について」を参照のこと。

(38) 中島次郎「司馬江漢の海保青陵宛書簡について」『文学研究論集 文学・史学・地理学（17）』明治大学大学院、2002年。

相値齒疎頭禿後 十年世味話甜酸 女兒聞
有京華客 半下蘆簾偷眼看（「寛齋先生遺
稿 卷二」）⁽³⁹⁾

市河寛齋（1749–1820）は青陵の著述にも「鶴
ガ友富山侯ノ儒者」（「綱目駁談」『全集』p.238）
として登場する人物、市河小左衛門。富山藩
の藩儒で、寛齋は号。江戸で林家に学び、昌
平黌の學員長となったが寛政異学の禁のため
退職。寛政3年より20年余、富山藩の儒
官を務めた。博学才敏で特に詩にすぐれてい
た。また、前述の釈雲室とも交流があり、上
尾の郷学聚正義塾の創設に協力した。⁽⁴¹⁾

寛政12（1800）年 庚申 46歳

- 元日を京都で迎える。（寛政2年参照。）
- この頃、和歌山へ行く。「變理談」完成が文
化3年なので、その5年前は寛政12年にな
る。「鶴五六年前紀州和歌山へ下ル。」（「變
理談」『全集』p.466。）

◎春、司馬江漢に転居その他を知らせる書簡
を送る。

「春中、御差出之御状、漸八月にして相達し
候」。⁽⁴²⁾

◎春、弟子、岡田鶴鳴の『鶴鳴文鈔』に序文
を著す。

『近世漢学者伝記著作大事典』、岡田鶴鳴の

欄に「業を海保青陵に受く。」⁽⁴³⁾とあり、同付属
系譜図、復古学の欄に「荻生徂徠——宇佐美
澗水——海保青陵——岡田鶴鳴」と記されて
いる。また東京都立中央図書館渡辺刀水旧蔵
諸家書簡文庫に所蔵されている海保青陵書簡
（植松次郎右衛門宛、書簡年不詳）に「私門人河
内之岡田治左衛門と申す人」とあり、青陵自
身による「門人岡田治左衛門」という記述を
確認することができる。

岡田鶴鳴著『鶴鳴文鈔 上』は東京都立中
央図書館加賀文庫に所蔵されている。そこに
青陵の寄せた「鶴鳴文鈔序」が収められてお
り、序文末尾に「庚申之春 海保皐鶴議」と
ある。『大阪名家著述目録』によれば、岡田鶴
鳴の名は皐、字は士聞、通称は本房、治右衛
門、鶴鳴は号。北河内郡一ノ宮の人。代々幕
臣水野監物に仕えたという。一ノ宮の之祠職
を兼ね、19歳の時に江戸に出て、勤仕の余暇
に海保青陵の門で学んだとある。岡田鶴鳴の
生没年は不祥であるが、青陵が江戸で塾を開
いていた頃に19歳であるならば、江戸での青
陵開塾が青陵22–3歳の頃なので、青陵より
4–5歳年若いことになる。帰阪後は江村北海
と交わり、経史を講ずることを楽しんだとい
う。⁽⁴⁶⁾

◎8月27日付司馬江漢の返書を受け取る。

(39) 「寛齋先生遺稿卷二」（摺斐高注『市河寛齋 大窪詩仏 江戸詩人選集第五巻』所収、岩波書店、1991年、p.108。）

(40) 前掲八木、p.75 参照。

(41) 「市河寛齋略年譜」（前掲『江戸詩人選集第五巻』所収、p.383）参照。

(42) 前掲中島論文参照。

(43) 関儀一郎・関義直共編『近世漢学者伝記著作大事典』井田書店、1943年、p.122。

(44) 前掲『近世漢学者伝記著作大事典』付属資料系譜図、p.72。

(45) 青陵書簡は「治左衛門」となっているが、「治左衛門」は青陵の誤りかもしれない。

中野好夫「司馬江漢考(14)」(『新潮』1982年11月号)、同著「司馬江漢考(15)」(『新潮』1982年12月号)において、江漢から青陵宛「八月二十七日付書簡」の考察がなされている。中野論文では、その書簡の成立年代が明確ではなかったが、前掲中島次郎「司馬江漢の海保青陵宛書簡について」によって、その成立年代が明らかになっている。

◎この頃(?),「河内三疋亭集書画帖」の書画を記す。

『国文学研究資料館報第29号』(1987年9月)に新収資料紹介として宮崎修多河内三疋亭集書画帖が記されている。「河内三疋亭集書画帖」とは三疋亭が収集した詩箋、歌稿、発句短歌、画、書簡その他絹本紙本取り混せて合計238点が貼りこまれた折本一帖である。蒐集者の三疋亭から請われて書かれた皆川淇園の序文が「文化二年仲夏三日」となっている。上方では片山北海、篠崎三島、皆川淇園、海保青陵、浦上春琴、頼春水、木村兼葭堂、十時梅岩ら、関東では大窪詩仏、豊島豊洲、谷文晁、菊池五山、立原翠軒、宋紫石らの作品が収められており、序文にある文化2年頃にまとめたものと考えられるという。年記は古いもので元禄3年、延享、宝暦、安永、天明、寛政、享和、文化とばらつきがあり、年記のないものもある。海保青陵の書画は『国文学

研究資料館報』に掲載されているが年記はな⁽⁴⁷⁾い。青陵は上方の作者として紹介されているので、在京時代と考えられる。青陵が遊歴を終えて京都に落ち着いたのは文化3年の9月以降なので、その時期以降に書かれたとすると序文の年記のほうが早いことになる。青陵が初めて京へ上った天明9/寛政元(1789)年、以降寛政13年に再び江戸へ下るまでの間は京都・大坂を中心に過ごしていたと考えられる。従って「河内三疋亭集書画帖」にある書画は寛政年間に記されたと考えるのが妥当なのではないだろうか。

寛政13/享和元(1801)年 辛酉 47歳

●元日を京都で迎える。(寛政2年参照。)

◎2月、弟、角田彪が尾張藩主徳川斉朝の正室淑姫の御物頭になる。淑姫は将軍家斉の娘で、尾張藩主斉朝へ嫁⁽⁴⁸⁾いだ。

「同年二月九日、山本半右衛門跡淑姫様御附物頭被仰付」(史料1「角田家系譜図」)

●5月15日、尾張藩明倫堂督学の細井平洲(1728-1801)が大病を患ったため、月例講義の人材不足により青陵は再び請われて江戸へ戻る。

「尾藩ノ細井甚三郎大病ニテ、月並ノ講書ノ人不足セリトテ、江戸へ下ラネバナラヌワケニナリテ下レリ。又、御目見ヲ仰セ付ラレタ

(46) 大阪府立図書館編『大阪名家著述目録』1914年、p.251。『国書人名辞典』によれば、岡田鶴鳴の妻は京都の人で、「奥のあら海」という著作がある女流詩人。『国書人名辞典第一巻』岩波書店、1993年、p.365。

(47) 宮崎修多「河内三疋亭集書画帖」(『国文学研究資料館報第29号』所収、1987年9月、p.5。)

(48) 「尾張徳川家系譜附録尾張家御系図」(『名古屋叢書三編第一巻』名古屋市蓬左文庫編、1988年)参照のこと。

り。」(「稽古談卷之五」『全集』p.104。)

「享和元年酉五月十五日、病氣全快ニ付願之
通御目見」(史料1「角田家系譜図」)

●11月、中島孝昌の「三芳野名勝図會」の序
文を記す。

序文の末尾に、「享和辛酉 冬十一月 青陵
皐鶴萬和」とある。(埼玉県立図書館蔵『武蔵三
芳野名勝図絵』)八木清治によれば、中島孝昌
(1766-1808)は武蔵川越の商人。若くして文
雅の道に志し、俳句や狂歌を能くした。郷土
史にも関心を示し、享和元年に『三芳野名勝
図會』を脱稿した。⁽⁴⁹⁾

◎この頃、釈雲室と共に渋谷から目黒へ郊行、
七絶題詩を記す。

「織路転来臨廓野、隔田花樹糝芸々、両三松
下唯蕭寺、門外古碑不弁、文与雲室上人郊行
自渋谷至目黒途中 鶴(印、海保皐鶴)」⁽⁵⁰⁾

前掲相見香雨「雲室修禪余墨」に、図画19
幀が収められている「雲室上人画帖」の考察
がなされている。その18番目に青陵の詩が掲
載されているようである。相見によれば、こ
れは寛政12年頃に書かれたものではないか、
ということであるが、寛政12年、青陵は江戸
にいない。おそらくその翌年、細井平洲の代
替要員として尾張藩の江戸詰めに請われた享
和元年から享和三年頃の事であろうと推測で

⁽⁵¹⁾
きる。

享和3(1803)年 癸亥 49歳

●春、中江松窠道人著「杜氏徵古書傳」序を
撰す。

「杜氏徵古書傳序」(前述谷村『青陵遺編集』所
収、p.241)末尾に「享和癸亥春」とある。前
述の八木清治によれば、『杜氏徵古書傳』とは
南画家、中江杜濬の著作で、山水画における
木・石などの素材の描き方や構図の取り方な
どを教授するものであるという。青陵の著し
た「杜氏徵古書傳」序を読むと、書家の佐野
東洲、宋紫石に師事した董九如との交遊、さ
らに董九如に教えを受けた脇坂竹斎、金子金
陵、中江杜濬らと青陵の交遊がわかる。⁽⁵²⁾ 杜濬
(1748-1816)は京都の僧で、後還俗して中江
氏と称した。近江の人という説もある。高芙
蓉(1722-1784)に師事。青陵と親交のあった
稻毛屋山や前出の源惟良(1789年の事項参照)
も高芙蓉に師事している。⁽⁵³⁾ 中江杜濬に関する
文献は、三村竹清「五適先生杜濬伝」、⁽⁵⁴⁾「五適
先生琴伝説」がある。⁽⁵⁵⁾

◎この頃、『養心談』成立。⁽⁵⁶⁾

(49) 前掲八木、p.74。

(50) 前掲相見香雨「雲室修禪余墨」p.342。

(51) 前掲相見香雨「雲室修禪余墨」pp.340-350。

(52) 前掲八木、p.77、p.83。

(53) 青陵の著作「東驢」に登場。

(54) 前掲『日本印人伝』p.127、p.136、pp.281-282、pp.291-292 参照。

(55) 森銑三監修、日本書誌学大系23『三村竹清集 五』所収、青裳堂書店、1983年。

(56) 前掲蔵並、1990年、p.34、「養心談」成立年の考察がなされている。

4. 北陸時代

享和4／文化元(1804)年 甲子 50歳

●尾張藩の藩儒を勤めて3年、江戸の水土が合わず、しばしば大病を患い、それを理由に辞職。(寛政13／享和元年参照。)

尾張藩には3年勤めたと青陵は述べているが、史料1「角田家系譜図」では青陵の暇願いが享和三年となっていて矛盾する。史料1「角田家系譜図」に「享和元年」に「病氣全快ニ付願之通御目見」とあること、青陵が尾張藩で「三年勤メタレドモ」(『稽古談卷之五』『全集』p.104)、「三年ノ間学問用」(『経済話』『全集』p.353)と述べていることから、寛政13／享和元の尾張藩出仕から三年間で致士と解釈したい。

●春、江戸を発ち、越後へ向かう。途中、上州箕輪に遊ぶ。逗留先では皆集まって書を読んだ。箕輪の西、松井田の上、永浜に滞在(57)中同村の木暮氏の招きにより老子を講義。

「東驢」に「去年ノ春鶴ガ江戸ヲ立ツ迄ハ…」(『全集』p.368)とあるが、『東驢』の成立は文化2年なので、「去年ノ春」は文化元年になる。

●夏、新潟一の商人問屋、当座屋善平の招きで越後に入る。(『陰陽談』『全集』p.262)

八木清治によれば、当座屋善平の俗称は江口善平で当座屋は屋号。新潟大川前六の町の

大問屋で文雅を好み、家には多くの文墨の士(58)が出入りしていたという。

文化2(1805)年 乙丑 51歳

●元日は越後三條で迎える。(寛政2年参照。)

◎3月刊の中島孝昌編『文孝冊』に詩画賛を(59)著す。

揖斐高によれば、『文孝冊』は中島孝昌が老母のために諸名家の詩書画などを集めて一冊にしたもの。山本北山が序文を記していて、海保青陵は画賛を寄せている。青陵のほかに、大窪詩仏の詩、山東京伝の画などが収められて(60)いる。

●夏、金沢に遊び、「娼説」を著す。

「娼説跋」(谷村一太郎編『陰陽談』所収、野村書店、1935年、p.144)に「文化二年乙丑夏」とある。長山直治によれば、「娼説」は加賀藩士である富田景周(1744-1828)が編纂した漢詩文集『燕台風雅』に収録されたもので、その他に青陵の略歴と詩も収録されているという。富田景周は、人持組二千五百石の上士で、当時出銀奉行。経学・詩賦・国史などに通じ、『越登加三州志』など著書も多く、加賀藩を代表する学者の一人。青陵の著作『陰陽談』『稽古談』には景周の家で飲んだ酒、「七尾」に関して名前が登場する。また景周の詩集『櫻寧斎文集』には、青陵との交遊を示す詩三編が(61)収録されている。

(57) 「變理談」『全集』p.452, 「稽古談卷之二」『全集』p.44, 「天王談」『全集』pp.512-513。

(58) 前掲八木, p.75。

(59) 中島濟美『文孝冊』文化2年春, 東都書林千鐘房刊。(連歌俳諧集成 東京大学酒竹文庫蔵。)

(60) 揖斐高 付篇「大窪詩仏年譜稿」(『江戸詩歌論』所収, 汲古書院, 1998年, p.636) 参照。

(61) 富田景周については, 前掲長山, p.7, 前掲八木, p.70を参照。

●金沢では浅野屋秋台阮子と格別に懇意を結ぶ。(「東驢」『全集』p.357。)

「加賀藩故歩兵富永君墓誌名」(『青陵遺編集』所収, p.243)に「乙丑夏, 鶴始入金澤府」とある。前述八木に依れば, 浅野屋秋台阮子(?-1815)は, 金沢町人で, 書・篆刻に巧で, 茶事に通じ, 詩も作り, 戯画も描いた。通称は彦六。秋台のほかにも別号を多数持っていたようである。金沢で畳製造を業とし, 晩年に町会所の役人となった。⁽⁶²⁾

◎9月9日, 孔子像自面賛を作成。

石川県立歴史博物館所蔵, 孔子像の面賛幅に「文化乙丑秋重九之日」とある。⁽⁶³⁾

◎9月13日, 夜, 富田景周らと共に蒼龍寺に遊ぶ。

前掲長山論文に, 富田景周が作った漢詩が紹介されており, 景周が青陵と9月13日の夜に蒼龍寺で月を鑑賞していた様子が伺える。⁽⁶⁴⁾

◎冬, 金沢桶町の十村旅宿に滞在し, 隣町袋町に住む富津屋七左衛門から衣類や紙筆, 駕籠代などの支給を受け, 手厚いもてなしを受けた。

「余ガ金沢ニオリタルトキ, 旅宿凡ソ三所ホドカワリタリ。桶町ニオリタルトキ, 十村ノ旅宿ニオレリ。」(「陰陽談」『全集』p.250。)

「及見余老而貧。遠遊而惻独。特贈絮衣。数

寄紙筆。北州寒酷雪深。及又特助夜行輶夫之費。夕々必携酒殺。懇々相慰撫。余之所以堪寒與雪無恙於金府者。以得尹明也。(「撃竹斎尹名巖君之墓誌」)⁽⁶⁵⁾

富津屋七左衛門(1779-1809)は金沢袋町に居住する, 米仲買を業とする商人。引用の「撃竹斎尹名巖君」とは富津屋七左衛門のこと。墓誌は文化6年に青陵が撰した。⁽⁶⁶⁾

●暮れから文化3年初め, 江戸詰を命じられた富永権蔵のために『東驢』を執筆。(「東驢」『全集』pp.358-359。)

長山によれば, 富永権蔵(1779-1807)は石高1,050, 当時御徒頭を務めていた加賀藩士。青陵の記述から, 互に「俠トイフ病ヒ性」があることで親しくなり, 前述浅野屋秋台阮子を介して知り合った様子がわかる。30歳に満たない権蔵ではあったが, 青陵とはよほど話が合ったのであろう。「心ヲ養ヒ病ヲ予メ防グ事第一也。」として青陵は江戸で生活しなければならぬ権蔵の身を案じて「東驢」を贈ったのである。しかし, 後述のように権蔵は病を患い帰国, 文化4年, 4月18日に29歳で永眠する。⁽⁶⁷⁾「東驢」は, 江戸有職・風俗について記されていて, いわば江戸の情報誌になっている。権蔵に, 江戸で何かの折には訪ねるようにと書き記した青陵の友人達も紹介され

(62) 前掲八木, 1991年, p.78。

(63) 石川県立歴史博物館 資料課より。石川県立歴史博物館には青陵作の面賛幅2点と書幅1点が所蔵されている。

(64) 前掲長山, p.3, 7。

(65) 前掲谷村編『青陵遺編集』所収, p.244。墓碑銘については文化6年の事項参照。

(66) 前掲八木, p.75 参照。富津屋七左衛門については前掲長山, pp.8-9 参照のこと。

(67) 前掲長山, pp.7-8。前掲八木, p.70 参照。

ている。

◎弟はこの時期、麴町の尾張藩藩邸に居住。

「鶴ガ舎弟ハ鶴ガ本宅也。尾州屋敷麴町十丁目ノ屋敷ノ内ニ居ル也。淑姫君様御物頭ヲ勤メテ居ル也。是ハ尾州ノ御三家ノ間ノ事ハ詳カニ知リテ居ル也。」(『東鑑』『全集』p.369。)

●この年、『富貴談』が完成⁽⁶⁸⁾。文化2-3年頃の作品として『善中談』『天王談』『萬屋談』『占考談』(未発見)『瑞(端)談』(未発見)が挙げられる。

文化3(1806)年 丙寅 52歳

●3月5日、金沢から越中高岡へ行く。

青陵は文化3年、金沢から高岡に入るが、高岡に到着した日が3月5日であった事は、前掲長山論文に詳しく述べられている。長山によれば、『高岡史料』所収「河合氏記録」に、修三堂設立の中心人物であった横町屋弥三右衛(富田徳風)の覚書(修三堂に関する記事)が掲載されているという。3月5日に青陵が高岡に到着し、翌6日に弥三右衛らが青陵の宿を訪れて、修三堂開講に際する講義を依頼したようである⁽⁶⁹⁾。

●4月、高岡で「老子経」「中庸」「孟子」を講義⁽⁷⁰⁾。

●5月3日、高岡で修三堂開講式に参列。論語学而篇一章を講義する。謝礼として金200疋を受取る。修三堂の前額として「修三堂」⁽⁷¹⁾「求益」の2枚の題字を寄せる。

●5月、高岡郊外の牧野村にある、宗良親王(後醍醐天皇第八王子)の墓と伝えられる「撰館塚記」碑銘を撰する⁽⁷²⁾。

●高岡時報鐘の銘を撰する。(前掲『青陵遺編集』所収「撰館塚記」, p.241)。

長山によれば、高岡時報鐘とは、寺島蔵人(1777-1807)が設置したもので文化3年7月に完成している。寺島蔵人は青陵が高岡に滞在していた当時の高岡奉行二人の一人。石高450石、号は応養・静斎など。画家としても知られる。農政・財政通として名を揚げるが、年寄主導の従来の藩政を批判したため文政2年に遠慮、同8年に逼塞、天保7年には能登島に流刑され失脚した。長山は、寺島蔵人の思想に青陵の影響が及んでいるとする研究に対し、青陵の加賀藩滞在中の影響を過大評価⁽⁷³⁾できないと述べている⁽⁷⁴⁾。

(68) 「二十二ヨリ当年五十一ニ至リテ…」(『富貴談』『全集』p.521。)前掲蔵並、1990年、p.20に著作成立年代についての考察がなされている。『占考談』は未発見の作品である。「此気ノ法ハ次ノ占考談ニテ説ベシ。」とある。(『富貴談』『全集』p.521。)『善中談』→『天王談』→『萬屋談』→『占考談』の順は前掲長山、pp.5-6の考察順による。

(69) 前掲長山、pp.12-13、前掲八木、p.70参照。

(70) 谷村、蔵並両年譜、前掲長山、p.3参照。前掲谷村編、1935年、所収、増山安太郎「陰陽談の刊行を悦びて」(p.32)には高岡で青陵が何を講じたかについて考察している。

(71) 前掲『青陵遺編集』p.3参照。

(72) 前掲長山、p.13。(出典『高岡史料』上巻、p.1063。)

(73) 蔵並省自は、青陵の寺島蔵人への思想的影響があったとし、長山論文と見解を異にしている。前掲蔵並、1990年、p.146。

(74) 前掲長山、pp.13-15。

●夏、富田徳風（玄淵、高岡町人町屋弥三右衛門）の著作『宜深誌』に序文を記す。

◎また、徳風から先祖伝来の家宝の杖に関する記事を依頼され、「龍頭杖記」を著す。

徳風は当時町年寄を勤め、修三堂を設立、経営した。長山によれば、徳風は20歳の時に京都に遊学し、皆川淇園の門に入って経学を学び、そのかたわら本居宣長から国学を学んだという。『宜深誌』は彼の作で、彼の高祖父弥三右衛可氏（号は震風）⁽⁷⁵⁾の言行録。前掲『青陵遺編集』所収の「宜深誌序」の末尾に、「文化丙寅之夏書宇干高陵旅舎 青陵海保阜鶴」とあるが、慶應義塾大学図書館所蔵の写本『宜深誌序他』（编者、写本年月日等不詳）にはこの部分はない。前掲慶應大学所蔵本『宜深誌序他』所収「龍頭杖記」には「丙寅遊越中高陵所最驩之友曰富田玄淵…」とある。作成年月日の記載はないが、おそらく「宜深誌序」と同時期に、富田徳風から依頼されて記したものと推測する。

●7月4日、越中立山山頂に登る。（「綱目駁談」『全集』pp.237-238。）

◎7月6日、深夜に富山に戻り、友人の市河寛斎と会って立山や白山の話をする（室堂に2泊、桑谷にも2泊）。（「綱目駁談」『全集』pp.237-238。）

●新川郡十村沼保村の伊東彦四郎宅に逗留する。伊東彦四郎（1758-1834）は越中新川郡沼保村の十村役を務める農民。文化2年の扶持高は40石。⁽⁷⁶⁾（「綱目駁談」『全集』p.238。）

●越中福野にて洪範を講義する。⁽⁷⁷⁾

◎8月11日金沢を発ち、途中、山代・山中温泉に入湯、富津屋七左衛門（文化2年参照）などの金沢の友人たちに送られながら京都へ向かう。

「鶴又山中山代ニ入湯セリ。山中ノ湯ハ硫黄也。山代ノ湯ハ明礬也。」（「綱目駁談」『全集』p.239。）

「丙寅之秋。余還京師。又遠送二十里。」（「撃竹斎尹名巖君之墓誌」）⁽⁷⁸⁾

◎兼ねてから約束があった越前府中に立ち寄り、講義。20日程逗留。⁽⁷⁹⁾

◎9月1日越前を発つ。⁽⁸⁰⁾

◎9月5日に大津に到着、2日間逗留。⁽⁸¹⁾

◎9月7日に京都に着く。木屋町二条下ル二丁目の銭屋兵衛宅に仮寓。ここでは多くの人が青陵を訪ねて来た。⁽⁸²⁾

高瀬保「海保青陵書簡の考察」（『地方史研究 42-6』所収、1992年、p.4）に「八月十一日二金沢発軫、越前府中より兼而申込有之、立寄講書、二十日程逗留、当月朔日越前発、五日ニ大津へ着津、両日逗留、七日ニ京着、思ハシ

(75) 前掲長山、p.13、前掲八木、p.75 参照。

(76) 前掲八木、p.74 参照。

(77) 長山、蔵並両年譜共に出典は「福野町口碑」とのみ記されている。

(78) 前掲谷村編『青陵遺編集』所収、p.244、前掲長山、p.15 参照。

(79) 高瀬保「海保青陵書簡の考察」（『地方史研究 42-6』所収、1992年）より。

(80) 前掲高瀬より。

(81) 前掲高瀬より。

(82) 前掲高瀬より。

キ家有之迄 木屋町二条下ル二丁目 銭屋平兵衛借坐敷…」とある。本論文は、北陸古書共和国第三回古書展（平成2年正月に富山大和で開催）に出品された、海保青陵の「禎文賢弟」宛て書簡（立山博物館準備室所蔵）の考察である。この書簡により、文化3年、8月11日に金沢を經ってから9月7日に京都に到着して仮住まいを得るまでの青陵の足取りが明らかになった。仮寓の銭屋平兵衛宅では、青陵を訪ねて「日夜客來」、「一向無寸隙」という様子が伺える。なお、高瀬論文では「禎文賢弟」について具体的な人物名は不明となっているが、史料2の「青溪先生墓誌銘并序」にある青陵弟に関する記述、「彪字禎文」から、「禎文賢弟」とは青陵の弟であることが判明する。高瀬論文の考察書簡は、青陵が江戸の市谷尾張藩邸にいる弟に宛てたもので、京都に無事到着したことを知らせる書簡であったことがわかる。

●この年、『變理談』⁽⁸³⁾完成。『經濟話』⁽⁸⁴⁾執筆。

5. 京都時代

文化4（1807）年 丁卯 53歳

●7月、「加藩故歩兵使富永君墓誌銘」⁽⁸⁵⁾を撰する。

富永君とは前出（文化2年参照）の富永権蔵。長山によれば、権蔵は文化3年2月晦日に金沢を出て江戸詰めの勤務に付いたが、病気を患い帰国、翌四年、4月18日に29歳で没したという。「加藩故歩兵使富永君墓誌銘」には「今年五月初、津田又章書到曰、輻川君自東歸而臥數日、絶飲食、無他病而逝矣、輻川君者別號也、鶴沚然、…」とあり、5月初めに其の知らせを津田政隣からの手紙によって知ったことがわかる。青陵は権蔵の死を悼み、文化4年7月付けで「加藩故歩兵使富永君墓誌銘」を撰した。津田政隣は富永権蔵と同役の御徒頭であり、豊富な藩政史料を収録した「政鄰記」の著者として知られる。「政鄰記」は当時来藩した浦上玉堂・本多利明・脇坂義堂などの消息は載せるが、なぜか青陵に関する記事は見当たらないという。⁽⁸⁶⁾

文化5（1808）年 戊辰 54歳

●夏頃、京都にて長州藩山県大華と歆談。秋、⁽⁸⁷⁾大華帰国を送る序を撰する。

文化6（1809）年 己巳 55歳

●12月5日、撃竹斎尹名巖君之墓碑銘を撰する。（前掲谷村『青陵遺編集』所収、p.244。）「撃竹斎尹明巖君」とは前述（文化3年の事

(83) 前掲蔵並、1990年、p.24、「變理談」成立年の考察がなされている。

(84) 「此外種々ニ存ジ付タルコトアレドモ、旅行セマリタレバ此卷マデ書記セリ。」（「經濟話」『全集』p.352）の「セマリタル旅行」とは文化3年秋、金沢から京都へ向かう旅であると推測できる。前掲蔵並、1990年、p.27参照。

(85) 谷村一太郎編『青陵遺編集』國本出版社、1935年、pp.242-243。

(86) 前掲長山、p.8参照。

(87) 蔵並年譜より。出典は「山口県文書館蔵、吉田樟堂文庫」となっている。また蔵並は、長州藩と青陵のかかわりについて考察している。前掲蔵並、1990年参照。

項参照)の富津屋七左衛門のこと。文化2年の冬、青陵は七左衛門から、衣類や紙筆、駕籠代を給され、手厚い援助を受けていた様子はその墓誌から伺える。

文化7(1810)年 庚午 56歳

●4月、京都下鴨で葵祭りを見物。その時、青陵の門人、加島屋安兵衛に会う。翌日、安兵衛は青陵の学寮を訪れ、終日話をして帰る。(「綱目駁談」『全集』p.220。)

●9月9日、近江屋彦右エ門が来訪し、秩父絹について語る。(「升小談」『全集』p.435, 「綱目駁談」『全集』p.229, p.234, 文化3年, 9月7日の事項を参照。)

◎9月22日、飛脚屋に行き、加賀藩士、村井長世からの手紙を受取る。

「文化七年。二十二日ノ夜ニ飛脚屋ヘユキテ御書ヲエタリ。」(「綱目駁談」『全集』p.231。)

「綱目駁談」は青陵京都在住時、村井長世(1776-1827)宛てに書いたものとされている。村井長世の通称は又兵衛、村井氏の8代目として16,569石を領した加賀藩の重臣であり、⁽⁸⁸⁾化政期、産物方政策の推進者であった。

●9月24日、『綱目駁談』執筆中。⁽⁸⁹⁾

文化8(1811)年 辛未 57歳

◎夏、京都の医者、賀屋澹園の『続医断』の序文⁽⁹⁰⁾を記す。

序文の末尾に「辛未之夏 青陵海保阜鶴撰」とある。賀屋澹園の通称は恭安(1779-1842)、澹園は号、名は敬、萩の人。文化元年に京都へ遊学して吉益南涯に医を学び、後に長州藩主の側医として江戸藩邸に勤めた。藩の医学館⁽⁹¹⁾創設に尽力し、初代館長となった。

●京都を訪れた越中武田竹坡等に、洪範を講義する。(武田尚勝識「洪範談題言二則」海保阜鶴識「洪範談小引」,「洪範談」『全集』p.583, 参照。)

竹坡とは武田尚勝(竹村屋茂兵衛)の号。武田尚勝(1783-1833)は越中砺波郡戸出村の商人。家業は代々砺波地方の特産品である八講布の売買で、茂兵衛も京阪地方と越中を往復していた。⁽⁹²⁾また長山は、竹坡に青陵が書き送ったものが『陰陽談』と『新壑談』であるとしている。両書とも内容から判断して竹村屋茂兵衛に宛てられたものであるという従来の推定は妥当であると述べている。⁽⁹³⁾

●讃岐の中山鼈山と会う。⁽⁹⁴⁾

蔵並年譜には出典として「頼山陽全伝」とある。これは木崎愛吉「頼山陽膳傳 上巻」の

(88) 前掲八木, p.70。長山は青陵と村井長世の関わりについて述べている。前掲長山, pp.16-17。

(89) 加賀にいる村井長世と、京都の青陵との書簡が、飛脚で片道10日かかっていたことが青陵の記述から分かる。「綱目駁談」『全集』p.233。

(90) 賀屋澹園『続医断』文化8年辛未8月, 平安書林, 丘本嘉七・堺屋伊兵衛, 慶應義塾大学図書館所蔵。

(91) 前掲八木, p.74, および『国書人名事典一』(岩波書店, 1993年, p.522) 参照。

(92) 前掲八木, p.74。

(93) 前掲長山, pp.16-22 に詳しい考察がなされている。

(94) 前掲蔵並年譜より。出典は「頼山陽全伝」となっている。また蔵並年譜では「贅山」となっているが、「鼈山」が正しいと思われる。

文化8年5月20日の覧に記載されている内容に依るものと思われる。そこには讃岐から入京した中山鼈山が篠崎小竹に宛てた文が掲載されている。篠崎小竹は頼山陽と親交が深かった人物。鼈山は京都の儒学界の様子を次のように述べている。「海保青陵・朝倉荊山といふ者を訪ひしに、みな好古の人たり…大氏、洛儒は糊口に急なり、こゝを以て多くは學識膚浅にして、専ら巧言令色を務め、以て俗眼を眩す。然もこの二子は流風に偃蹇して、富貴に汲々たらず、豪傑の士と謂はざるべけんや。…」この記述から、京都での青陵の雰囲気をつかむことができる⁽⁹⁵⁾。

『讃岐人物傳』によれば、中山鼈山は寛政元(1789)年生まれ、文化12(1815)年に27歳で没している。父は『全讃史』の著者で徂徠学を信奉する中山城山(1763-1837)。鼈山は父に従って徂徠学を修めたという⁽⁹⁶⁾。

◎『升小談』成立⁽⁹⁷⁾。文化7-9年ごろの作品として、『三子談』『卒伍談』『驕民談』『字説

談』(以上四作品未発見)が挙げられる。また、文化8-9年の作品として『前識談』『活眼談』(未発見)が挙げられる⁽⁹⁸⁾。

文化9(1812)年 壬申 58歳

●4月、友人である堅田独得墓碑文を撰する。独得は号。堅田絨造(1746-1812)という京都の儒医。⁽⁹⁹⁾(『青陵遺編集』p.245)

●越中の富商井波氏、京都の青陵を訪ね、「石動嶺画讀」を依頼する。⁽¹⁰⁰⁾

●京都押小路富小路西入に居住。司馬江漢と会う。⁽¹⁰¹⁾(司馬江漢『無言道人筆記』)⁽¹⁰²⁾

◎『枢密談』成る。⁽¹⁰³⁾文化9-10年の作品として、『本富談』『承継談』『漕輦談』『課農談』が挙げられる(『承継談』以下3編は未発見の作品)。⁽¹⁰⁴⁾

文化10(1813)年 癸酉 59歳

●『待豪談』完成。(「待豪談」『全集』p.964。)

◎『陰陽談』⁽¹⁰⁵⁾『新壘談』⁽¹⁰⁶⁾『洪範談』⁽¹⁰⁷⁾成る。

(95) 木崎愛吉「頼山陽膳傳 上巻」p.298。(徳富猪一郎監修、木崎愛吉・頼成一共編『頼山陽全書』所収、頼山陽先生遺蹟顕彰会、1931年。)

(96) 福家惣衛『讃岐人物傳』香川新報社、1914年、pp.514-517。

(97) 前掲蔵並、1990年、p.32に『升小談』の成立年に関する考察がなされている。

(98) 前掲蔵並、1990年、p.20に青陵著作の成立年代について考察がなされている。

(99) 前掲八木、p.77。

(100) 「題石動嶺松圖」(谷村一太郎編『陰陽談』所収、野村書店、1935年、p.142。)

(101) 前掲中島、p.106、前掲中野「司馬江漢考(14)」,「司馬江漢考(15)」を参照。

(102) 『司馬江漢全集第二巻』所収、八坂書房、1993年、p.137。

(103) 前掲蔵並、1990年、pp.32-33。『枢密談』の成立年に関する考察がなされている。

(104) 前掲蔵並、1990年、pp.31-32。『本富談』成立年の考察がなされている。また同p.20から青陵著作の成立年代について考察がなされている。

(105) 前掲蔵並、1990年、pp.29-30。『陰陽談』成立年の考察がなされている。

(106) 前掲蔵並、1990年、p.28。『新壘談』成立年の考察がなされている。

(107) 前掲蔵並、1990年、p.25。『洪範談』成立年の考察がなされている。

●冬、『稽古談』完成。⁽¹⁰⁸⁾

日病歿』となっているので単なる誤植か。

文化 11 (1814) 年 甲戌 60 歳

●4月、『洪範談』3冊が、竹坡館蔵として京都、江戸、大坂の書店にて刊行される。⁽¹⁰⁹⁾

●『養蘆談』執筆、⁽¹¹⁰⁾『論民談』成る。⁽¹¹¹⁾

◎文化 10-11 年頃、『御衆談』成る。⁽¹¹²⁾

文化 12 (1815) 年 乙亥 61 歳

◎近常信、京都において「稽古談」を謄写する。⁽¹¹³⁾

文化 14 (1817) 年 丁丑 63 歳

○5月29日、病没。墓は現在も京都黒谷の金戒光明寺塔頭、西雲院内にある。

「海保青陵先生之墓」墓碑銘⁽¹¹⁴⁾

諱皐鶴字萬和姓海保号青陵江戸人淡開塾於京師講学不倦老莊自娛著有文法披雲洪範談干世老子古伝莊子解詩集文集未附刊刻文化十四年五月二十九日病歿壽六十三先生無嗣今井氏女某不朽建石墓在洛東黒谷紫雲石側

蔵並年譜では「五月十九日、病没」となっている。墓碑銘には「文化十四年五月二十九

おわりに
——青陵墓碑銘について——

谷村一太郎は上記青陵墓碑銘の考察をし、⁽¹¹⁵⁾また蔵並省自も、青陵「晩年の一問題」として海保青陵墓碑銘の考察をしている。⁽¹¹⁶⁾両氏共に、生涯独り身で子孫を残さなかったはずの、海保青陵の墓を立てた「今井氏女」の追跡調査に触れているが、今井氏と青陵の関係はいずれも詳細不明という結果に終わっている。両氏の調査結果をまとめると以下のような情報になる。

昭和8(1933)年12月下旬、谷村氏は小川氏と共に西雲院へ参拝し、青陵墓誌に見る今井氏と青陵の関係を調査した。谷村氏は縁故ある家を教えられ訪問、今井家が幕末まで有名な弓師堺屋であった、ということのみ聞き得る。⁽¹¹⁷⁾一方、蔵並氏は昭和40(1965)年、同41年の夏に西雲院を訪問。住職の協力を得て今井氏を訪ね、以下3点を指摘している。今井家と青陵の関係は不詳であるが、今井氏の

(108)「稽古談」『全集』pp.110-111 参照。

(109)「洪範談」『全集』p.686に「文化甲戌四月 竹坡館蔵 発行書肆 江戸 北沢伊八 大坂 森本太助 京 林安五郎」とある。

(110)「養蘆談」『全集』p.187、前掲蔵並、1990年、p.33 参照。

(111) 前掲蔵並、1990年、p.33に『論民談』成立年の考察がなされている。

(112) 前掲蔵並、1990年、p.31、『御衆談』成立年の考察がなされている。

(113) 谷村年譜に、「故瀧本博士蔵稽古談謄本」とある。前掲谷村編『青陵遺編集』p.25。

(114) 前掲谷村編『青陵遺編集』p.8。

(115) 前掲谷村編『青陵遺編集』p.8。

(116) 前掲蔵並、1990年、pp.12-19。

(117) 前掲谷村編、p.8。

祖母によると、①今井家は幕末まで三条蹴上に居住し、弓師あるいは茶店を営んでいたらしい。②今井氏が堺屋の子孫であることは西雲院過去帳より明らかである（今井氏談）。③「西雲院過去帳」に「文化十四年丑年五月廿九日随応専順信士 堺屋弥兵衛父」と記載されている。西雲院にはこの「過去帳」のほかに、明治13年当時の西雲院住職 近藤海善師の筆による「盆供帳」（「随応院専順居士 海保先生之事」と記されている。）と「本檀家墓帳」（「随応院称誉専順居士」とあり、堺屋弥兵衛分の中に海保青陵先生墓と記。その海保青陵先生墓を消して上に「随応院称誉専順居士」とはり紙あり。）が存在し、3つとも法名が少しずつ異なることを蔵並氏は指摘している。⁽¹¹⁸⁾

筆者は平成18（2006）年9月、西雲院を訪問した。その後、西雲院副住職の紹介によって、今井氏のご子孫から話を聞く機会を得た。青陵の墓石近くに今井家の墓も存在している。①についてご子孫は、「弓師あるいは茶店」というのは聞いたことがないが、故今井氏（蔵並省自氏が訪ねた）は「かつて蹴上辺りは今井氏の土地で、今井家は粟田焼きの窯元であった」と話していたそうある。ご子孫は、「思い出してみれば、幼少時、家の納戸に焼き物がたくさん置いてあったことが記憶にある。」と述べられた。しかし、粟田焼きについての記述がある『雲林院宝山文書』の寛政11（1799）年

⁽¹¹⁹⁾『定』には、粟田焼き窯元8名の中に「堺屋」の名はない。②について、蔵並氏は「今井氏が堺屋の子孫である」と記しているが、ご子孫によれば、「堺屋」というのは今井家の屋号であるという。したがって、「今井氏」が「堺屋」の子孫であるというよりは、今井氏と「堺屋」は同義であると解釈の方が正確であろう。③について、「西雲院過去帳」の記載は、「文化十四年丑年五月廿九日」に亡くなった「随応専順信士」が「堺屋弥兵衛」の「父」であるという意味に取れる。しかし、青陵は前述のように（文化9年参照）、司馬江漢に「自分は門人に常々、親族もいないので、死んだ時は火葬にしてその骨を粉にし、天へ吹き散らしてくれ、と言っている」と話をしていたし、また晩年の作である「稽古談」には、「終始妻ヲ置カズ、妾ヲ買ワズ、ユヘニ子ナシ。角田ノ家は舎弟継デオルコトナレバ、鶴用事ナシ。…鶴、当癸酉二五十九也。先今マデハ飢寒ニモ迫ラズニ、気儘ニ文章ヲカキテ遊ビタレバ、何モ心ニ苦シキコトモナシ。子孫ノ謀ヲスルニモアラズ。面白キ身ノ上ト思フテオル也。」⁽¹²⁰⁾と記していることから考えても、青陵に子供がいたことは想像しがたい。

蔵並氏がいう「西雲院過去帳」、「盆供帳」、「本檀家墓帳」はいずれも現存している。最も古い「本檀家墓帳」の情報が真実に近いのではないかと予測できるが、「本檀家墓帳」が作

(118) 前傾蔵並、1990年、pp.12-19。

(119) 京都市編『京都の歴史6』学芸書林、1973年、pp.219-223 参照。

(120) 「稽古談巻之五」『全集』p.110。「富貴談」にも「妻妾ヲ持タルコトナケレバ、子孫アラウハズナシ。」という記述が見られる。（『全集』p.521。）

成された文政2年の時点では、その記載から堺屋弥兵衛分として「海保青陵先生墓」が管理されていたことが明らかである。しかしその後、誰が何時、「海保青陵先生墓」を墨で消し、「随応院称誉専順居士」とはり紙をしたかについては不祥である。また、明治13年当時の住職の筆による「盆供帳」には、「随応院専順居士 海保先生之事」と記されており、「本檀家墓帳」と「盆供帳」の二つは、「随応院（称誉）専順居士」が海保青陵であると認識している点で一致する。現在使用されている「西雲院過去帳」にのみ「随応専順信士 堺屋弥兵衛父」と記されている。もうひとつ、副住職から今井家の仏壇に保管されていたという過去帳の提示を受けた。それは「昭和四十二年四月改」とあり、「廿九日」の蘭に「随応院専順居士 文化十四年五月 弥兵衛父」とある。この「父」という字が崩れていて、「事」の旧字「事」の崩し字の写し間違いではないか、という指摘を西雲院副住職から得た。以上から、「西雲院過去帳」の記載、「文化十四年丑年五月廿九日随応専順信士 堺屋弥兵衛父」のうち、「随応専順信士」は、「随応院専順居士」の、「堺屋弥兵衛父」は「堺屋弥兵衛

事」の転写ミスではないかという予測を立てることが可能である。なお、ご子孫によれば、海保青陵と今井家の詳しい事情についてはこれまで聞いたことがなく、ただ墓を守るように、とのみ言い伝えられているということであった。

尾張藩の教化政策にも携わった徂徠学派の儒者を父に持ち、江戸で生まれ育った海保青陵は、常にアカデミックな雰囲気にあっていた。また芸苑の世界にも通じ、多くの文化人とも交遊があった。家格が重んじられる社会にあって、御三家尾張藩の藩儒を自ら2度も辞し、生涯妻子を持たず、人生の後半を「自由自在ノ身」である遊歴文化人として過ごした海保青陵の、ある一部分だけを取り出してもその全体像をつかむことはできない。蔵並年譜以降、明らかになったひとつひとつの事実は小さいことかもしれないが、こうした伝記的研究の積み重ねによって見えてくる海保青陵の人間像は、その思想形成過程や思惟構造を知る上で有効な手がかりとなり得るのではないだろうか。

（経済学研究科博士課程）